

を迎ふべきや。吾人毎に云ふ。學問辯論成就せば、破權門理の旗を擧げ、皆歸妙法の春を迎へんと。實に然なり。されど今の世を見るに布教にて改宗せしもの未だ一人としてあるを聽かず。之れ如何なる理由に依るや。學問辯論成就の上、如何に布教すとも、吾人の言を信じて、本化の直道に歸する者なき時は、布教の功何れにかある。皆歸妙法の實何れの時をか期すべき。吾人深く憂となす。思ふに當世の布教は第一の目的たる衆生化益の本意を捨て、謝儀の多少を以つて本意となす。布教師は先づ謝儀の多少を問ひ、而して後謝儀多ければ欣然として招きに應じ、謝儀少なきと聽いては動ぜざること須彌山の如し。あゝ吾人は謝儀を目的として布教すべきか。衆生化益を目的として布教すべきか。若し謝儀を以て目的とするならば吾人は大にそれを痛せん。衣を着たる猫なりと。但に吾人のみならず三世の諸佛も亦吾人の如く痛し玉ふべし。故に吾人は須く卑しき心を捨て、大慈悲心に住し、以つて真心より布教の功を收むべきなり。されば必ず萬民は水の流るゝが如く吾法に歸せん。若し夫れ逆謗の者あらば、宜しく權實二教の戦を起して其の起盡を正し、彼等の迷障を仆して淳々説示する處あるべし。吾祖建長

五年の夏の頃、始めて本地難思の妙法を弘通し玉へるに、初めは一人二人一村一郡、はては日本國の一切衆生皆吾祖の敵となる。然れども結句妙法に歸する者幾十萬の多きに至りしは何ぞや。一に吾祖の慈悲廣大の徳に依るなり。此を以て知る今の世布教の功なきは唯だ説者の胸中謝儀のみありて、赤心よりほごばしる慈悲の念に缺けたることを。従つて聽衆に感動を與へざる所以なり。乞ふ深く之を思へ。

海

伊藤 海聞

吾々學生には暑中休暇が一番楽しい。或は山に、或は海に、或は慕しい父母の膝下に、何れも思い／＼に此三句を費すのである。自分は二句を旅行に、一句を堺の海岸に送た。山に計り居て、海と云ふ物に對して物珍しい自分は、海岸の生活が心ゆくばかり嬉しかった。泳ぎを心得ぬ故、別段海へ這入らうとは思はぬ。只石の上に立つて、絶えず果しも無き大海原から、大うねりにうねつて來ては、巖に碎ける波の壯觀を見るのが、何より楽しかった。そうして何時も斯んな考を持た。偉大なる事海の如きは無いであらう。其面積は

地球の三分の二を占め、其深き處は三萬尺にも達すとか。表には數萬の船舶を浮べ、底には數十萬の動植物を棲ましめてゐる。又壯快なる事海の如きは無いであらう。靜なる時は水天一色、恰も瑠璃の如く、天津乙女の降り來て浴みもすべきに、一度怒れば狂瀾天を捲き、怒濤山の如く、大艦巨舶と雖も木の葉の如く掀翻するのである。又靈妙なる事海に如きものは無いであらう。千萬年の昔から千萬年の後に亘て、萬川を懐に入れて溢れず、大陽に照されて滅せず、常に瑠璃を湛へて居る。此美妙なる壯快なる偉大なる大海に面した小湊は、偉聖日蓮を生んだ。怒濤岸を嚼み狂瀾巖に迷ふ俎の危岩と、風寒く雪深き日本海の激浪に圍まれた佐渡ヶ島とは、聖日蓮をして勸持品の數々の二字を色讀せしめた。山碧く海濶き龍ノ口は、聖日蓮をして本地を開顯せしめた。『法華經は川流江河等一切の水を一滴も漏さぬ大海也』とは、聖日蓮が絶大の妙法を贊じた金句である。『我日本の大船とならん』と、是れ生死の大海に苦む衆生を涅槃の彼岸に引入れんとし給ふ聖日蓮の至誠なる悲願である。『四海豈兩主あらんや』とは聖日蓮が我曹に娑婆の救主を示された好箇の比喩である。『譬如一切川流乃至海爲第一乃此法華經最爲深大』

とは、八萬四千の法門七千餘卷の經典の心髓を定め給ひし釋尊の金言である。『一天四海皆歸妙法』とは是れ釋尊の本懷我祖の悲願である。我は今海に向て靜に法華經の絶大と、我祖の恩徳を思つた。然して法華經の微妙を讚美し、我祖の恩徳を讚歎する時、大に海をも謠ふべきである事を知つた。鞏鞏たる潮の音は之れ唱題の聲、澎湃たる波濤は之れ折伏の狀、壯麗太古の雄姿は之れ久遠の境界を默示してをるのである。嗚呼壯なる哉海よ。美なる哉海よと、旬日滯在中、海に向つて立つ毎に斯んな感じが繰り返された。然して自分は海を愛し海に親む一人となつた。而して又我海國民の全躰をも、海を愛し海に親む人と爲し度く思つた。

